

特 集

「試験・研究機関に期待するもの」
 —現場技術力の向上と人づくりを目指して—

佐藤 文俊

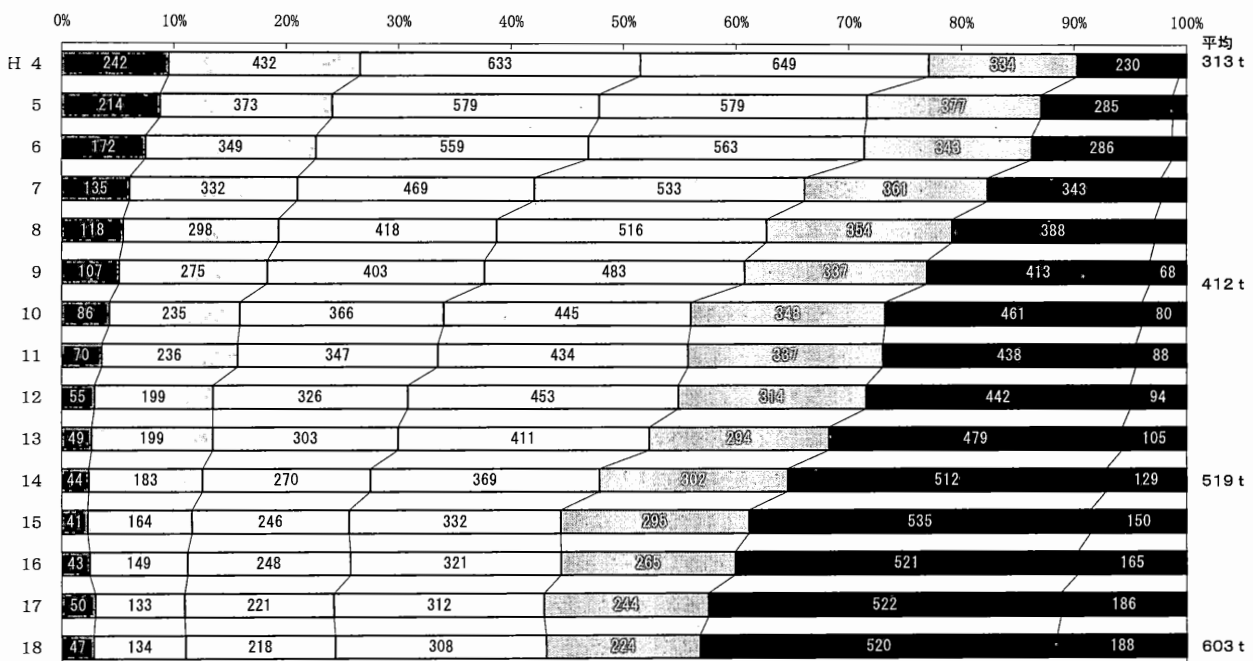
十勝農業協同組合連合会
 帯広市西3条南7丁目14番地

○はじめに、最近の十勝の酪農の現状と推移について、表などを用いてみていきたいと思います。表1は、「平成(H)4年からの生乳出荷乳量規模別構成割合の推移」であります。十勝のH18年生乳出荷農家戸数は1,637戸であり、H4年から15年間で900戸の減少(H4年対比64.5%)となっております。H18年の1戸当たり平均出荷量は603トンでH4年対比193%と確実に規模拡大は進んでまいりました。特に、平均出荷量はH4年313トン、H9年は412トン、H14年は519トンと5年間隔で100トン台の増加という実績でありました。また、確実に500トン以上階層が増加してきたことがわかります。特に、最近では1001トン以上階層の伸びが著しいことが見て取れると思います。約1割の大型階層が、十勝全体の3割近くの生産量を占めるという実績になっていることが特徴的であります。

これは十勝だけのことではなく、全道的な傾向であると思います。表2には「乳牛飼育頭数規模別(個人経営)推移」について示しました。H18年の1戸当たり平均飼養頭数は117頭で、H12年が平均97頭でしたので、6年間で20%の増加となり頭数規模におきましても確実に生乳出荷量と同様、規模拡大していることがわかります。

○表3は「乳牛検定成績(305日)の産次別乳量レベル別分布状況」を示したものです。これは、十勝の搾乳牛の生産能力がどのくらいのレベルに達しているかを知ることができる表です。初産牛33.5%、2産牛25%と全体の6割弱を1・2産牛が占めており(検定牛のデータですので若干比率は高めになります)、初産牛の平均能力も8,686kg、2産目以降からは10,000kgを超えるというハイレベルにまで向上してきているのが現実で

表1 出荷乳量規模別構成比の推移

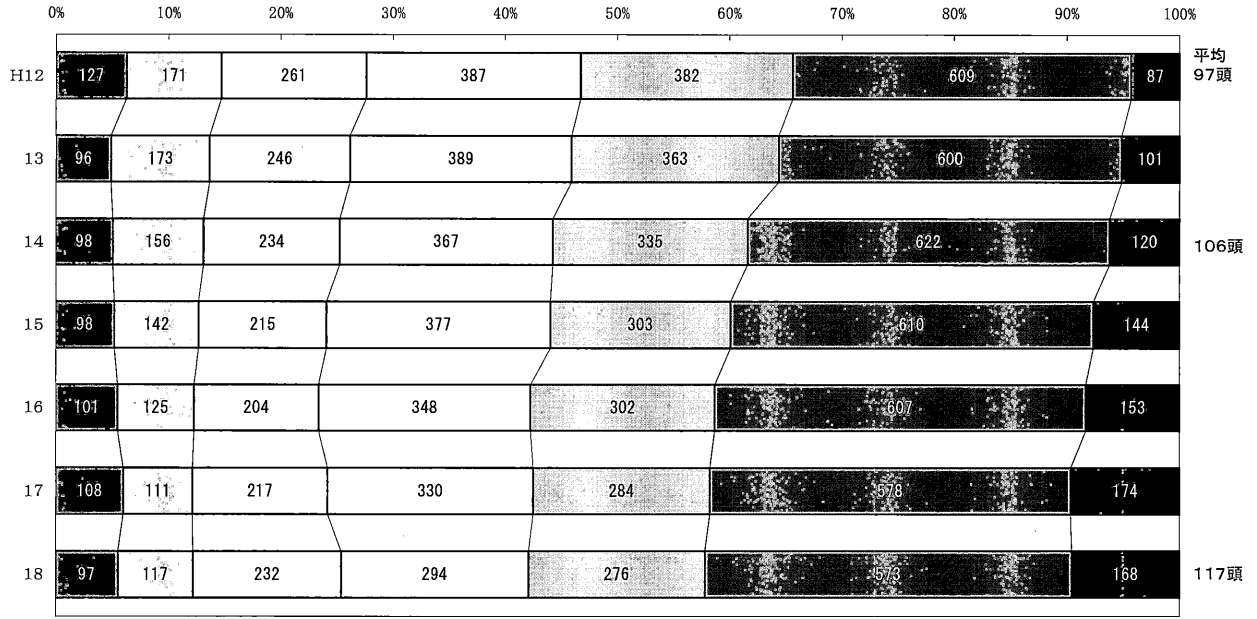


■ 100t以下 □ 101~200t □ 201~300t □ 301~400t □ 401~500t ■ 501~1,000t ■ 1,001t以上

※ グラフ内の数値は該当戸数

受理 2007年11月12日

表2 個人経営の乳牛飼育頭数規模別構成比の推移



□20頭以下 □21~40頭 □41~60頭 □61~80頭 □81~100頭 □101~200頭 ■201頭以上

※ グラフ内の数値は該当戸数。

表3 305日乳量の産次別乳量レベル別分布状況

(十勝管内2006年1月~12月検定終了牛 2回搾乳の記録) 305日検定乳量

区分	1 産		2 産		3 産		4 産		5 産以上		全 体		
	頭	%	頭	%	頭	%	頭	%	頭	%	頭	%	
検 定 乳 量 レ ベ ル	>10,000kg	11,337	17.4	25,499	52.4	19,707	59.4	12,727	58.1	12,782	49.8	82,052	42.2
	9,000	15,597	23.9	10,790	22.2	6,811	20.5	4,369	20.0	5,475	21.3	43,042	22.1
	8,000	17,792	27.3	6,942	14.3	3,852	11.6	2,756	12.6	3,995	15.6	35,337	18.2
	7,000	12,665	19.4	3,479	7.2	1,707	5.1	1,345	6.1	2,093	8.1	21,289	10.9
	6,000	5,656	8.7	1,409	2.9	774	2.3	551	2.5	947	3.7	9,337	4.8
	<6,000	2,171	3.3	529	1.1	302	0.9	145	0.7	390	1.5	3,537	1.8
	計	65,218	100.0	48,648	100.0	33,153	100.0	21,893	100.0	25,682	100.0	194,594	100.0
頭数割合 (%)	33.5		25.0		17.0		11.3		13.2		100.0		
平均能力 (kg)	8,686		10,095		10,452		10,373		9,995		9,701		
前年平均乳量 (kg)	8,566		9,900		10,210		10,278		9,892		9,577		
対前年比 (%)	101.4		102.0		102.4		100.9		101.0		101.3		

す。全体でも10,000kg以上の乳牛が4割以上を占めるという高能力牛群の時代であります。

○表4は「十勝における自給飼料構造の推移」を示したものです。この調査は、毎年飼料構造が安定している2月に実施したものです。近年の傾向を一言で申し上げるならば、「グラスサイレージ類の伸びが顕著である」と言うことです。このことは、TMR給与体系の普及や「TMRセンター」および「コントラクター組織」の拡充・強化などの影響が考えられますが、とにかく飼料構造は大きく変化してきたことは事実であります。

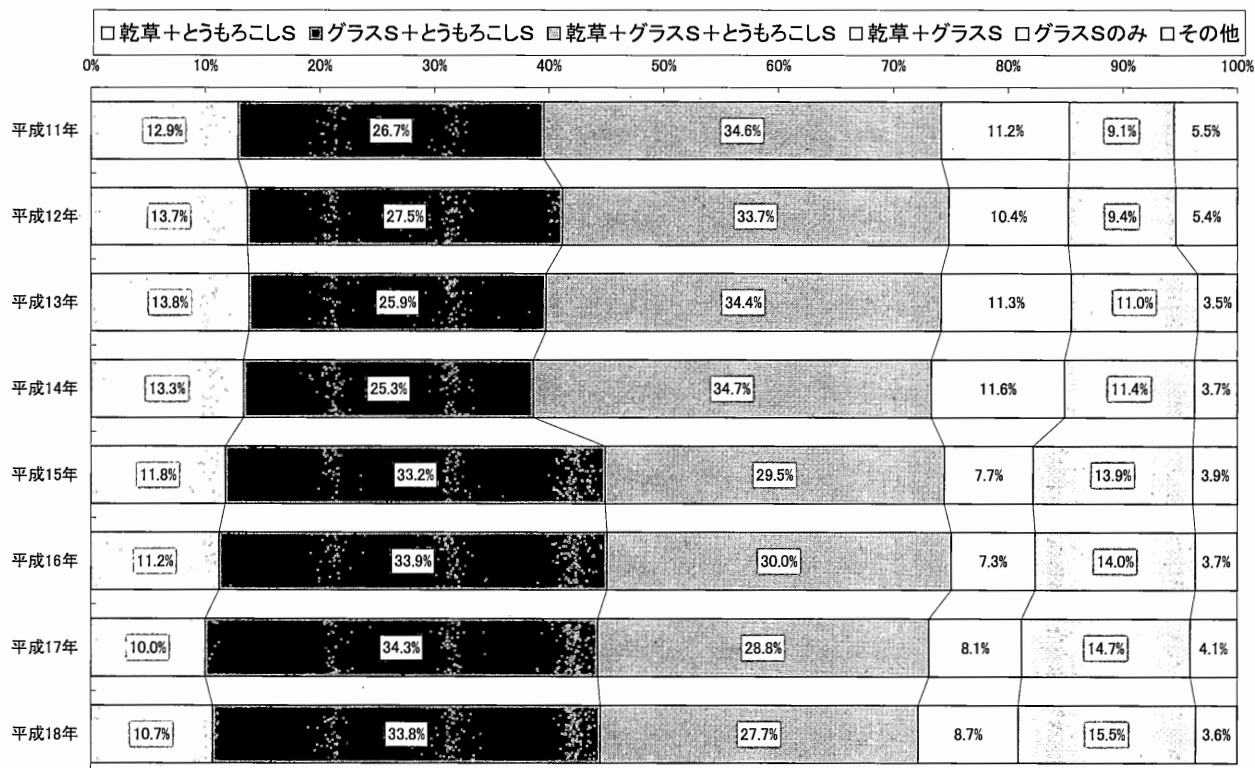
○私共で毎年調査取り纏めております「H18年十勝畜産統計」では、お手元の資料の上から4行目にも記載

してありますが、経産牛1頭当たり平均乳量は8,381kg

(H4年は7,220kg)・年間平均濃厚飼料給与量は3,185kg(H4年は3,097kg)であります。特に、「乳牛の能力向上は濃厚飼料を多く給与した結果である」とよく論評している方がおられますが、15年間で年間平均濃厚飼料給与量は88kgの増加(102.8%増)、1頭当たり年間平均能力は1,161kgの向上(116.1%増)なのです。一般に言われている濃厚飼料給与量の増加ではなく、乳牛の遺伝的能力の向上と自給飼料生産・飼養管理技術全体のレベルアップの成果であることが伺われます。

○今後の十勝酪農現場を考えますと、表1の通り、平均以下の現状維持階層と規模拡大志向(フリーストール、パーラー方式)の家族経営完結型(1,000t前後)

表4 十勝管内における飼料構造の変化



あるいは労働力雇用を前提とした大型経営型(2,000 t以上)階層に二極化した結果の逆正規分布(すり鉢型)現象になることは確実であります。

○このことは飼養頭数規模別階層の推移でも同様の傾向が伺われます(今後もこの傾向は続くと思察します)。

今後、一層生産現場に近ければ近いほど、現場技術力向上と生産基盤支援体制の確立が強く求められることから、現場での課題と研究・教育機関に期待する取り組みを若干述べさせていただきます。大きく4つに分けてみました。

①は、労働力(常雇い・パート)雇用の安定性の確保と技術力向上システムの確立です。

- ・ 今後は、大型農場が主力となることから、マネージャー・ハーズマンなど人材の確保と安定雇用を如何に図るかおよび経営者としての労務管理能力の向上が求められます。

- ・ また、高度化する酪農技術の習得と練磨のためのシステム作りを、どのような規模で、どんな組織・機関が連携してどう実現するかが重要且つ大きな課題であります。

②は、育成部門の切り離しの可能性(契約育成・地域共同育成施設運営)の検討です。

域内分業あるいは専門化による波及効果は、過重労働からの開放や雇用の創設なども含め以下の点が上げられます。

- ・ グループ分けの細分化による育成技術の高度化と施設投資の効率化

- ・ 専門育成農家群の出現(一般個別酪農家の育成部門も担う)=新たな雇用の場

- ・ 初産分娩月齢が現状27~28ヶ月という経営上膨大な経済損失の解消、つまり理想月齢22~24ヶ月の実現は生産コストの低減・乳牛償却費の軽減などにつながります。

③は、自給飼料生産・調整・給与作業など外部委託システムの拡充・強化です。

- ・ 個々の経営体が搾乳に特化する可能性の検討と経営規模拡大展望が開けてきます。

- ・ 自給飼料にかかわる労働過重からの開放も非常に重要な効用のひとつです。

- ・ 飼料作物栽培やサイレージ調整技術など高度化・専門化への対応が効率よく出来る体制作りを図る必要があります。一方、委託者と受託者とのミスマッチ解消のための技術普及体制の充実が大切となります。

④は、研究機関に対しての技術面に期待するもの(生産コストの低減と所得向上方策)です。酪農現場は、「長年の経験の積み上げやカン・直観力などで、解らないけどうまく行く」ということがあります。逆説的には、いくら良い技術でも「儲からないこと」はしないものです。また、普及現場は、技術も相手側のことも知り抜いていないと「作り上げたり、知らしめたり、出来ないものである」とよく言われております。したがって、

- ・ 単独でなく学際的な研究(健康な家畜の生産性を高めるための生理学・微生物学・栄養学・繁殖学・行動学・畜舎管理学・搾乳衛生学など)を求めています

し、

- ・家畜の快適性に関する研究（家畜生理学をベースとした行動学・畜舎管理学・栄養学などを包含した技術体系の確立）を心がけて頂きたいと要望いたします。
- ・生産現場は、総合的な現場サポートシステム（トラブルシューティング、コンサルティング）を担える人材の養成と体制の確立が急務ではありますが、口で言うほど簡単ではなく、頭の痛い課題ではありますが、克服

しなければなりません。皆様方のご支援をお願いいたします。

最後にまとめとして、一言述べさせていただきます。

○研究機関の専門家は、現場を直視し、課題や解決策を探す努力をして頂きたいと思えます。

「解決のヒントは現場に必ずある」と昔から言われているからであります。皆様方の奮闘を期待いたしまして終わりいたします。ありがとうございました。